2021年度
ノートルダム清心女子大学
日本語日本文学科

推薦図書リスト

古典文学

1.　『古典がもっと好きになる』

田中貴子　　岩波ジュニア新書

「古文」の科目の授業や教科書に限らない、古典の全体像や文学の生み出された背景に目を向けた読み方を教えてくれる本。『徒然草』から京都一条大路の鬼の話へ、あるいは百人一首の和歌「立別れいなばの山の嶺におふるまつとしきかば今かへりこむ」から作者在原行平の説話伝承へと踏み込んでゆきます。

2.『知ってる古文の知らない魅力』

鈴木健一　　講談社現代新書

『徒然草』の冒頭文「つれづれなるままに日ぐらし…」は、兼好のオリジナルではなく、平安時代から多くの人々に使われ、共通理解を得ている表現だった。古典文学が持つ「共同性」という地盤を明らかにし、作品の新たな味わい方を教えてくれる本。

3.『万葉集から古代を読みとく』

上野誠　　ちくま新書

本書は、「歌とは何か」「歌を書くとは、どういうことか」「歌を集めて歌集をつくるとは、どういうことか」「『万葉集』とは、どういう歌集なのか」、これらを万葉歌の歌表現や当時の考古学的資料から浮き彫りにし、奈良時代「万葉びと」の時代を生き生きと描き出します。

4. 『はじめての日本神話―『古事記』を読みとく』

坂本勝　　ちくまプリマー新書

イザナキ、イザナミにアマテラス、スサノヲ、ヤマタノヲロチに稲羽の白うさぎ。これら『古事記』に描かれる神話世界は、どのような世界を表しているのでしょうか。なぜ古代の人々は神々の世界を創造したのでしょうか。本書は、ここから日本神話の世界に迫っていきます。

5.『百人一首の正体』

吉海直人　　角川ソフィア文庫

カルタ遊びで有名な『百人一首』とは、そもそもどのように作られたのでしょうか。
本書では、その成り立ちに加え、『百人一首』がどのように私たちの生活の中に入り込んできたのかについても書かれています。
また、最後に百首すべての歌の解説が掲載されています。

6.『男読み源氏物語』

高木和子　　朝日新書

『源氏物語』は女性のための物語と思われがちですが、そんなことはありません。『源氏物語』には、政治の駆け引きなど、男社会の側面が赤裸々に描かれています。その男社会を詳細に読み解いていきます。

7. 『源氏物語ものがたり』

島内景二　新潮新書

『源氏物語』は時代を超えて受け継がれてきた古典であり、受け継ぐ人たちがいたからこそ、伝わってきたわけです。本書は、『源氏物語』を研究してきた、平安末の藤原定家から、近代のアーサー・ウェイリーにいたる9人の男たちを描いています。

8.『恋する伊勢物語』

俵万智　　ちくま文庫

歌物語の代表作である『伊勢物語』を、歌人・俵万智が現代語訳した際に生まれたエッセイ。平安時代の恋模様を、現代女性の様々な視点からやわらかく語る。とっつきにくかった古典や和歌のハードルを、あっという間にくずしてくれる一冊。

9. 『いくさ物語の世界—中世軍記文学を読む』

日下力　　岩波新書

『平家物語』に代表される軍記文学は、合戦を面白く華々しく描く一方で、敗者や女性に視線を注ぎ、深い哀しみを伝える。戦（いくさ）を描くが、戦が繰り返され世の中が混乱することを決して望まない物語が、どのように誕生したのかをひもといてくれる書。

10.『和歌とは何か』

渡部泰明　岩波新書

枕詞・序詞・掛詞・縁語。私たちが和歌に苦手意識を抱く原因となる修辞技法を、「演技」という視点から解明する。これらの技法が、実は、声や記憶といった人の身体感覚を深く揺さぶるものであることが実感でき、和歌に対する見方を一変させてくれる本。

11.『蕪村』

藤田真一　　岩波新書

「菜の花や月は東に日は西に」の句で親しまれる、江戸の俳人蕪村を知る本。石川啄木や与謝野晶子ら近代詩人たちの見出した蕪村の魅力を端緒に、芭蕉再評価の時代に生きた蕪村の活動とまなざしを確かめ、句と俳画を読み解いていきます。一門の人々との繋がりや俳書の本づくりも垣間見ることができます。

12. 『江戸の出版統制　—弾圧に翻弄された戯作者たち』

佐藤至子　　吉川弘文館（歴史文化ライブラリー）

江戸の町人文学は幕府の統制下に置かれ、しばしば弾圧を受けます。言論の自由が保障される現代とは異なり、江戸時代の文学は政治と切っても切り離せない関係にありました。この本からは幕府の弾圧に苦しみながらも、時には柔軟に対応し、新たな作品を世に出し続けた作者・出版元の工夫がうかがえます。

13.　『江戸しぐさの正体　—教育をむしばむ偽りの伝統』

原田実　　星海社新書

大手企業の社員教育や、義務教育にまで取り入れられることのあった「江戸しぐさ」が、実は歴史の捏造によるものだということを明らかにします。著者は「江戸しぐさ」が基盤とする歴史背景の誤りを客観的に指摘し、誤った歴史が疑われることなく一般に広く受け入れられた事実に警鐘を鳴らします。

14. 『新唐詩選』

吉川幸次郎・三好達治　　岩波新書

「この書物は、東洋のすぐれた財宝であり、世界の詩のなかでも最もすぐれたものの一つである唐の詩を、わが国の若い世代の人たちに近づけるべく、吉川と三好が協力して執筆したものである。」（著者序文）という、中国、唐の時代の詩を鑑賞する本。杜甫、李白らの作品を、詩人たちの人生をあわせ見ながら丁寧に読み解くことを教えてくれます。

15. 『漢文法基礎　本当にわかる漢文入門』

二畳庵主人・加地伸行　　講談社学術文庫

漢文は、近代以前の人たち必須の教養であり、日本の古典は漢文の影響抜きには考えられません。そのような漢文の読み方について、「二畳庵主人という名の老師が高校生に語りかける口調」でわかりやすく一から学べます。

16. 『漢文の読みかた』

奥平卓　　岩波ジュニア新書

漢文作品から、古代中国の雰囲気が伝わる多彩なエピソードを取り集め、それらを読んでいく内にレ点・返り点などの読み方などの理解も進む、という本。参考書だけでは味気ない、暗記ばかりで興味が持てない、という人は、これも並行して読んでみるとよい。

近代文学

17. 『読書力』

齋藤孝　　岩波新書

大学入学にあたって、皆さんには自分の内面世界を豊か広げるための幅広い領域の読書を次々と進めていただきたいと願っています。

その読書が、本当に自分の力になる意味深い技となるには、どのような認識や方法によって読書を習慣化するのがよいか、教育学者齋藤孝が巧みに伝えてくれる本です。

18. 『本の読み方　スロー・リーディングの実践』

平野啓一郎　　PHP文庫

作家・平野啓一郎さんが、「スロー・リーディング」つまり「量」より「質」を重視した読書を勧めた、小説の読み方の入門書です。夏目漱石、森鷗外、フランツ・カフカ、川端康成、三島由紀夫など不朽の名作から自作の『葬送』まで、読書のコツを紹介し、自分らしい読み方をすすめています。

19.『物語の役割』

小川洋子　　ちくまプリマー新書

人生には、受け入れられないような、辛く悲しい出来事があります。そんなときは、出来事を〈物語〉にすることによって、私たちはその出来事を受け入れることができる、と本書は語り、私たちを勇気づけてくれます。

20.『超入門　現代文学理論講座』

亀井秀雄監修・蓼沼正美　ちくまプリマー新書

現代文学理論の講義を受けた受講生が、高校生向けにやさしく、たつ楽しく書いた本。

この本を読めば、文学に関する現代最先端の理論がよくわかります。また、理論というと、面倒で難しいイメージがありますが、実に便利な道具だということもわかります。

日本語学

21.『女ことばと日本語』

中村桃子　岩波新書

「女ことば」がどのように形成されてきたか、またそれを見る世間の態度がどう変化したか、わかりやすく説明してくれます。「女ことば」に限らず、「言葉の乱れ」に関心がある人には、ぜひ参考にしてほしい書籍です。

22.『ていうか、やっぱり日本語だよね。』

泉子・K・メイナード　　大修館書店

正式で改まった日本語だけでなく、私たちが何気なく使っているごくふつうの話し言葉も、言語研究では分析対象になります。私たちが他者に自分の気持ちを伝える際、そのような表現がどんな役割をはたしているのかを平易な言葉で解説した本です。

23.　『日本の一文 30選』

中村明　　岩波新書

日本の近代小説について＜表現＞という切り口から迫った他に類のない本です。文学研究と日本語研究がクロスオーバーする領域です。著名な文学作品がなぜ感動をもたらすのかについて、＜表現の選択＞から考察しています。

24.『くらべてわかるオノマトペ』

小野正弘　　東洋館出版社

「『がっくり』と『がっかり』、どっちの方が落ち込んでる？」といった具合に、テーマを決めて２つのオノマトペ50組を比較し、「こっちの方が〇〇」と判定します。軽妙に示された結論に納得した後で、よく読み返してみてください。時に語源を説き、時に品詞論的実態に迫りと、語学的手法を一通り示していることに気づきます。

25. 『やさしい日本語−多文化共生社会へ−』

庵功雄　岩波新書

日本語を母語としない人々との共通言語くやさしい日本語＞を構築していこうと呼びかける本。「日本における言語的マイノリティ−が直面する困難」「「普通」のものには名前がない」「同情を超え、競争できる社会を」等々、興味深い節が並びます。言葉の考察に留まらず、私たちの社会のありようそのものを見つめ直す経験ができます。

言語文化

26. 『新編　教えるということ』

大村はま　　ちくま学芸文庫

50年以上教師として教育実践の場に立った著者が、本当に“教える”ということはどういうことなのか、具体的な数々のエピソードを通して語った表題作「教えるということ」など、プロの教師としてあるべき姿、教育に取り組む姿勢について、きびしくかつ暖かく語る一冊。

27.『日本語の作文技術』

本多勝一　　朝日文庫

文の構造を分析する力や適切な語句の並べ方、正しい読点の打ち方など、わかりやすい文章を書くための秘訣を、数々の実例をあげながら論理的に解説している実践的文章指南の白眉ともいえる本。

28.　『漢字―生い立ちとその背景―』

白川　静　　岩波新書

冒頭、聖書ヨハネ伝の「はじめにことばがあった。ことばは神とともにあり、ことばは神であった」を引用し、文字（漢字）学者・白川は、さらにつづけるとすればと前置きし、

「次ぎに文字があった。文字は神とともにあり、文字は神であった」という。最古の漢字、中国殷・周時代の甲骨文・金文は、古代的な思惟や民俗を引き出す生活の祈念碑であるととらえる。

29.『書きあぐねている人のための小説入門』

保坂和志　中公文庫

芥川賞受賞作家・保坂和志さんが、自身の創作過程を具体的に紹介しながら、小説を書くときに大切にすべきことを丁寧に教えてくれる入門書です。小説とは何か、自分なりの感じ方・考え方をどう生かすか、人間や風景を描くのはなぜなのか、どのような書き方が可能なのかがわかり、読めば書きたくなる本です。

30.『図書館へ行こう』

田中共子　　岩波ジュニア新書

読み終えると貴女はたちまち“図書館の達人”となっているでしょう。なぜなら、図書館で受けることのできる各種のサービスを、詳細に丁寧に教えてくれているからです。また、将来「図書館の司書になりたい」と思っている人の入門書としてもお薦めします。

お問い合わせ

ノートルダム清心女子大学　日本語日本文学科

- 700-8516
  岡山市北区伊福町2-16-9
  TEL 086-252-2539　Fax086-252-5327
- Email:　jpn1@post.ndsu.ac.jp
- URL:　https://www.ndsu.ac.jp/blog/article/?category=2